

みんなでききる

minna-de-ikiru.org

社会福祉法人みんなでききる

法人本部

〒943-0834 新潟県上越市西城町2-10-25-307

TEL:025-530-7260

<http://www.minna-de-ikiru.org/>

みんなでききる

みんなといきる

# このまちの 暮らしをつくるのは、 福祉です。

身近な暮らしのなかに、  
新しい変化を起こせるとしたら  
それは、福祉のしごとだと思う。

子どもを育てること、家族を支えること。  
人は、いつの時代でも、そこに知恵をしぼり  
想いを込めて、よりよい暮らしをつくってきました。

これからは、わたしたちとあなたの番。

福祉のしごとは、子どもから大人まで全ての人をつなぐ。  
福祉のしごとは、人と人の関わりで、まちを元気にできる。

それは、誰もがお互いを「感じ合い」ながら暮らせるまち。  
それは、誰もがお互いに「活かし合い」ながら暮らせるまち。

瞬く間に世界を変えてしまう技術ではないけれど  
人生にしっかりと寄り添う、関わりの術が、いま必要です。

みんなでいきる みんなといきる

一人ひとりの顔を見ながら少しずつ変えていこう。  
わたしたちのまちに「寄り添いのイノベーション」を福祉から。

## 決めたら楽しむ、 タイで学んだ一番のこと。

久保 久美子 2006年入職  
障害福祉事業部りとらいふ 「りとるの家 はなれ」 副所長

久保は、タイで障害児支援にたずさわったことがある。3000人の子どもがいる施設のなかでNGOの活動に参加した。のべ3年間、帰国してはホテルのアルバイトでお金を貯めて、またタイへ向かった。なぜそこまでして続けられたのか？と、問うと「楽しかったからでしょうね」と笑顔で真っすぐに答えた。「自分がしたいことをやっているから、毎日が充実していました。めちゃくちゃかわいい子どもたちと、寝泊まりを一緒にして関わることが何よりのやりがいでしたから。」やりたいことはやれるタイミングを逃さないように、というのが彼女の生き方だ。自分がタイで活動できたのも、家族や社会の状況が海外の現場に飛び込んでいけるタイミングだったからだ振り返る。いま、職員のケアや相談に乗るポジションを任されるようになったが、後輩にアドバイスをするときにもそのことを伝えるようにしている。「よくバスと船の話をするんです。外国を旅したときにバスか船かを迷って、私は船を選びました。結果的に船ルートは何時間もかかり大失敗（笑）。でも後悔はしませんでした。人のアドバイスを聞いてバスに乗る自分もあり得たかも知れませんが、決めたのは私。反省はしても後悔はなし。」そんな彼女だから職員からの相談事に、こうしなさいという言葉は一切なく、最後は自分自身で決断することが成長につながると信じている。「反対の立場なら私もそうして欲しいですからね！」なんと彼女らしい。



## 職場には、 もうひとつの家族がある。

高橋 喜寛 2005年入職  
高齢福祉事業部サックス 支援・相談課長

海のある街で暮らす高橋は、娘に釣りを教えるのが何より楽しいと言う。まだ小学生だがすでにキス釣りに夢中だそう。どちらかと言えば表情の固い方だが、家族のことを語る時には自然と優しい顔つきになっている。じいちゃんだった高橋の仕事は支援相談員で、介護施設の利用希望者やその家族と向き合って入居の審査や相談に乗っている。「介護の世界で利用者さんの想いを大事にするのは当たり前のことです。その上で職員にも楽しく働いてもらうためにお互いに助け合うことが大事だと思っていますし、僕自身も周りに随分助けられています。」と現場のチームワークを強調する。勤務地の「サックス米山」には、介護士、看護師、医師など専門職の仲間がたくさんいる。仕事で悩んだときには、それぞれの立場からアドバイスももらえるので安心だ。なるほど、そういう考え方もあるのか、と気づくこともある。それに地域のソーシャルワーカーなど外部の関係者との連携も多い。「一緒に働くときは、いやな思いをさせたくありません。でも、真剣に取り組むがゆえにどうしても意見のぶつかりはあります。その時にいかにチームの和を保つかを意識していますね。」高橋は職場の窓口役になっている分、人一倍その気持ちが強いのかも知れない。彼が入居前の利用者の家族と連絡をとり責任を持って状況を把握することで、介護士や看護師は寄り添いやすくなる。この職場もまた一つの大きな「家族」なのだ。



## 思いに寄り添い、 人生に寄り添う。

斉藤 奈々 2011年入職  
高齢福祉事業部サックス 介護老人保健施設サックス米山  
ユニットリーダー

「ここは個室制だから、利用者一人ひとりと丁寧に向き合えると思いました。」介護にどう関わられるかで職場を決めた斉藤は、利用者が生きてきた人生への思いを大切にあげたいと言う。たとえば、縫い物が得意な利用者なら、縫い物を人に教えることで昔の経験や知識を思い出したんだん元気になることもある。農業、教師、営業などその人なりの人生経験や性格がある。もともと、物静かな性格の方は、大勢にいるときは話しかけてくれなくても、二人だけの時間に「ありがとね」とこっそり言ってくれたりもする。「関わり方はそれぞれに違いますね。何でもかんでも手伝うとリハビリにならないし、かといって見守り過ぎると介護士としての信頼関係が築けません。そのバランスはいつも悩むところです。」認知症が進んで会話ができなくなった方に対しては名前すら覚えてもらえず寂しいこともあるという。また、ターミナルケアの方なら自分のシフトが休みの日に亡くなられていてショックを受けることもあった。反対に自宅復帰に向けての取り組みが実って嬉しかったことも。「はじめは寝たきり状態だったのが、だんだん床ずれも回復して杖歩行ができるまでになりました。最後には自宅をバリアフリーに改装して帰宅されたんです。」そんな姿を見ることができるのが斉藤の何よりのやりがいになっている。利用者の数だけ人生があり、彼女は介護の仕事のなかで、その様々な人生と出会い続ける。





自分が幸せな気持ちを持つ。  
それは子どもに伝わる。

矢澤 優佳 2014年入職  
障害福祉事業部とりららふ 放課後等デイサービス「ららん」

保育士と社会福祉士の資格がある矢澤は、障害を持った子どもたちを支援している。「子どもたちが人と関わっていくなかで、私自身が幸せな気持ちを持っていないと、子どもたちも幸せな気持ちになってもらえないと思うんです。だから自分の心の在り方をすごく意識しています。」気持ちを表現することがむずかしい子が多い現場では、感情や表情を敏感に感じ取れるように表情をしっかりと見る。「反対に私のちょっとした不安な気持ちや緊張感を子どもたちは敏感に感じ取っています。子どもの様子を通してはっとさせられることが多いですね。」家族とも友だちとも違う関係性だが、彼女がめざすのは一緒に楽しさや嬉しさを感じられる存在になることだ。

本当は誰もが  
自宅に居たいはず、  
だから考え続ける。

碓井 涼平 2012年入職  
高齢福祉事業部サンクス 介護老人保健施設サンクス米山  
介護士

体を使うことも多いけど、頭を使うことも多い仕事だと言う碓井。利用者は本当なら施設よりも自宅で過ごしたいはず。だから、一日一日をできるだけ穏やかに過ごしてもらいたいと思っている。「利用者さん一人ひとりにとって、一番良い介護って何だろうかと毎日考えています。距離感もすごく考えますね。どんな人とも対等に接しようと思えますけど自分は人見知りするほうなので、利用者さんとすぐ仲良くなれるかといえばそうではないし。でも、たぶんそれは利用者さんにも同じようにあることだろうと思います。」仕事とはいえ他人同士が出会うわけで、いきなりぐっと踏み込んでいくのは信頼を失うこともある。出会いの距離感が碓井のこだわりだ。



みんなが必要としている。  
だからやらないといけない。

大島 誠  
理事長

1997年にナホトカ号の重油流出という事件があった。理事長の大島はそのとき青年会議所の代表をしていた。沿岸清掃のボランティア活動に関わるうちに市民活動を応援する中間支援組織の必要性を感じ、くびき野NPOサポートセンターを設立した。大島は言う「非常時だけでなく、平時から活動を支える仕組みを求めている人がたくさんいるとわかったからです」と。「私がやっている仕事は今も同じことだと思います。社会が必要としている仕組みや組織を整えることです。これから人口減少社会になる日本では、誰もが自分らしく生きられる持続可能な社会を支える仕組みづくりが求められています。それには介護や福祉が必要なんです。」大島は続けて言う「私には会社や仕組みを作れるという役割があります。人にはそれぞれ自分にできる“役割”があり、“役割”の違いでお互いを補い助け合い、その先に豊かな地域や社会の暮らしがある」と。ぜひあなたも自分の役割をみつけてほしい。そして、「みんなでいきる」は、これからの地域の姿を、上越の街から描き出していく。みんなの“役割”を活かして。